

令和 6年度 園評価書

I 経営の重点に関わること

評価段階 (A:よくできている B:概ねできている、C:あまりできていない、D:できていない)

1 教育・保育目標	2 重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策(来年度の具体的な取組目標等)
自分が好き！ 友だちが好き！ 園科が好き！	自分で決めていく！ 失敗は成功のもと！ 成功のひたすらやってみる!!	子ども達が自分で決めていける環境と機会が用意されている	・園庭環境についてそれぞれの遊びの拠点を工夫し、子どもが気温や状況に応じて自分で決めた場所で好きな遊びが展開できるようにしている。また園庭だけでなく室内も自由に行き来する事が出来るよう、職員で連携を取っている。 ・1日の中で遊びだけでなく生活の中でも自分でどのようにやりたいかという、子どもの気持ちを尊重し、状況に応じて見守ったり一緒に考えたりするなど、子どもの心の動きに寄り添いながら関わっている	A	A	・小学校では学校の評価を考る時に、年度当初から決めたものを教師が精いっぱいやったか、子どもに手立てを打ったか、工夫したか、その説明ができるか、という事を基準に評価している。	・子ども達が好きな遊びを選び安心して遊びを継続できるよう、スペースや時間の保障を工夫できるようにすると共に、職員が学年の壁を越えてみんなで子どもを見合える体制づくりも継続していく
		自分の思いや考え、感じたことを行動や仕草、言葉で表現している	・自分の考えた事やアイデア、こうした気持ちなど、その子ならではの表現で伝えようとする姿が増えた。職員や友達と関わながら様々な行事や体験を重ね、自信をもって生活するようになってきている ・友達同士のトラブルも大切な経験として捉え、大人が先読みしないよう見極め関わっていきながら、子どもがその子なりの表現で思いを伝えようとする姿を受け止めている。	A	A	・子ども達がやりたいたいことを見つけて友達と関わながら安心して遊びを続けている姿が伝わった。	・子ども自身が“やってみよう”“もっとこうしたい”という気持ちで挑戦する姿を受け止め見守るとともに、ひとりひとりの発達を把握し危険がないか見極めながら適切な援助をしていく
		友だちと一緒に試行錯誤できる関わりを考えた保育が展開されている	・友達と相談したり試したりして繰り返し遊びたくなるような環境を工夫し、時に友達と一緒に「もっとこうしよう」「こうしたらいいかも」と遊びを展開している姿もある一方、なかなか思いに寄り添っていないいけない、折り合いを付けられない姿もある。どんな状況でも考え、自分で決めていけるようにその子の思いや頑張り工夫等を認めていき、納得出来るまで見守ったり寄り添っていた	A	A	・評価指標と照らし合わせ子ども達の様子を見た時に、子どもを見た時に、先生の思いや願っているも、達成できていると感じている	・思いのすれ違いや気付けない事で分かり合えない時でも、その子なりの表現する姿を受け止めたり子ども同士がお互いに向き合い考えたり決めたりしながら解決に向かう力を育む関わりを検討していく

II 各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策(来年度の具体的な取組目標等)
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	友だちと関わりやすい遊具や道具及び場の状況や雰囲気など環境が考えられている	・園庭では、全体で見合う体制が取れており、子ども達が自由に好きな場所で遊びを進めていけるよう工夫している。おのずと異年齢の交流があり、上のクラスの子を憧れる気持ちや、小さい子への思いやりが育っている。 ・毎日の振り返りの時間を使い、その日の保育を職員間で共有する中で、各学年の今日の様子を知り、明日への関わりに繋がっている	A	A	・こども園は送迎時に細やかに保護者と連絡を取ったり対応をしたりしている事が評価できる。	・子どもの実態に合わせて各学年の保育内容や保育者の思いを振り返りなどで伝え合い、職員が全体で見合う体制にこれらも引き継ぎ行っていく ・毎日遊び地区での保育の振り返りを行い、その日の遊びがどのように行われていたか全職員が把握できるようにする
		(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	・園でのその日の活動を毎日玄関で知らせたり、行事など写真やコメントを用いたドキュメンテーションを作った。子どもの様子から活動を通じて保育者の思いや意図、子どもの育ちなどが分かるよう意識して作った。 ・子ども達が安心して過ごせるよう保護者との連絡を丁寧に行い、一人ひとりの生活に合わせた保育を心掛けた。	B	A	・早番から担任へ担任から順番への伝達がどのようになっているかわかった。また、伝わらないと感じる事もなしに、このよみ伝達のツールもあつシステムができていたので評価できる。	・子ども一人ひとりが安心して園生活を送れるよう、家庭と園で連携を把握しながら子どもの様子を把握する。家庭での様子など、もう少し具体的な交流ができるような聞き方を工夫するが、保護者へ関心時に気負わせることの無いよう配慮する
		(3)環境を通して行う教育及び保育	考える情報を与えたり、試行錯誤や工夫を促す道具や道具を用意するなどイメージや目的の共有を促している	・1人ひとりが自分で遊びを見つけたり選んだりできるような環境を作っていた。また、遊びの中で子どもが考え、自分でやってみようとする姿を見て見守った。大人が答えや思いを先走って言ったり伝えたりする事のないよう意識していく事で、失敗しても自分で納得できる結果になる経験を大切に子ども自身が自分で答えを決めてやってみようとする姿に繋がっていった	A	A	・保護者が忘れる事もある。それを園の先生たちは保護者のせいになっていないとあきらめずして、保護者としてどうかしたいと思う
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	子どもたちが自身で、安全に気をつける意識が持てるよう体験や指導の機会を設け、命の大切さを伝えている	・告知せずに訓練を行い、子どもも職員もその場の状況で判断し行動していく経験から“自分の命を守るのは自分”という意識が持てるようにしていた ・防災教育の研修から、地震が起きた時身を守るポーズや訓練の年間計画を見直し、より適切と思われる内容に調整した。子ども達も危険な箇所を確認し合ったり地震車で揺れを感じたりの経験を通じて繰り返し伝えている。大半の子が揺れの中で安定した身構えを習得できている	B	B	・災害について、“カエルポーズ”“カブカブポーズ”は来年に向けて今後も引き続き指導してほしい。また、より適切な訓練計画を実践しながら身を守る事が定着していけると良い。	・“自分の命は自分で守る”という意識を子ども達が持てる事が定着していけるよう、振り返ること、や伝え方を工夫していく ・訓練内容や状況など災害のイメージを持ちながら訓練が出来るように計画書を作成する
		(1)健康教育の充実	食育活動を通して健康に関心をもち、手洗いや鼻をかむなどが習慣つくよう日々健康指導をしている	・毎月食育の会を実施し、季節の食材や昔から伝わっている行事食など紹介し健康との結びつきへの関心にも繋げていった。また、玄関に食育のコーナーとして会でやった事を貼り出し、送迎時に親子で一緒に見たり話をしたりする機会と、園での活動状況の発信ができた ・幼児は全員自分で鼻をかむことが出来るようになった。乳児は多少介助は必要なもの自分から鼻を拭きとったり「出ちゃったから拭いて」保育者に伝えたりする姿がある。手洗いや鼻のかみ方も個人差がある為、子どもに合わせて気づくような関わりをしったり洗いやかみ方を伝えたりしていき、習慣が身につくようかかわっている	A	A	・支援児については、小学校では共有しているれば評価はAとなる。保護者から見てどの子が支援児か分からなく位置づけている。(インクルージョンの環境で適切に障害も個性といわれているし、落ち着いているという事は障害の特性に合わせて園が子どもに寄り添っているという事だと思)
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	発達にあった支援方法を職員間で学び合い、自分の力で出来るようになっていける援助を行う	・支援児が今のような遊びに興味を持っているか、また生活の中でどのような姿か、成長している姿や保育者の関わり等を職員間で共有し、どの職員が関わっても、同じ思いや対応ができる ・会議し出れない職員への報告や、特別支援報告書の研修報告など職員の専門知識を深めていきたい	B	A	・支援が必要な子どもに対してどの職員が関わっても本児が困らないような支援が出来るよう、サブサポートを職員間で共有し、子ども理解を深めた上で個別の対応などを統一していく	・支援が必要な子どもに対してどの職員が関わっても本児が困らないような支援が出来るよう、サブサポートを職員間で共有し、子ども理解を深めた上で個別の対応などを統一していく
		(1)組織体制の充実	園務分掌担当者を中心に、見通しを持った企画と連携を意識した協力体制の下、時間を有効に使った取り組みを試行錯誤している	・自分の分掌に対して責任を持ち、早めに進めることを意識しながら行事や企画を進めてきた。進捗状況の報告や検討すべき事を、職員会議や日々の振り返りの中で話し合い、共通理解をしていった。 ・協力体制のあるものの職員会議し出れない職員へ会議報告や必要な話し合いをする時間を取るよう調整してきたが、急な変更等で伝達が遅れた場面もあったので、今後の課題として速やかな伝達体制を構築していきたい	B	B	・組織において、人が多ければ伝わらない、人が少なければ一人一人の分掌が多くなるというのは学校も同じなので大変さは理解できる。いろいろと工夫しながら取り組んでいるのを来年に繋げていってほしい
6 研修	(1)研修体制の充実	「もっとやりたい」「もっとこうしたい」を支えていくために、子ども達が安心して取り組めたり意欲を持たせたりする援助について学びたい	・各学年の公開保育を通じて、子どもの内面を探ったり環境について話し合い子ども理解を深めていった。子どもの“やってみよう”“もっとこうしたい”を見守る事や支えていく事の大切さを改めて実感する事も多くなり、職員間で個々の理解を意識した保育に繋がっていった	A	A		・外部研修で学んだことを報告する機会を増やしていき学び合う環境や雰囲気を作る事で、自分たちの専門性を高めたい
		(1)教育・保育環境整備	子ども達が自分で探す、遊ぶ、決めることが出来る場が設定されている	・遊びの拠点を作ったことで子どもが自分で決めて好きな遊びを選び取り楽しむ姿が見られている。「もっとやりたい」「もっとこうしたい」と思いが膨らみ可動遊具なども思うように動かしながら友達と創りあげていくことを楽しんでいる ・一人ひとりが遊びを選びながら満足いくまで遊びに取り組めるよう時間や場所の保障をしていったことで、子ども達が朝から「今日は園庭で遊びをやるぞ」という思いを持って登園する姿が見られている	A	A	・一人ひとりが安心してできる中で、自分の好きな遊びを選び、「もっとやりたい」「もっとこうしたい」と主体的に遊びを続けたり、試行錯誤の中で遊びを深めたりしていけるよう、常に子どもの関心がどこにあるか捉え、環境を工夫していく
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	色々な手立てを考え、保護者と子育ての楽しさや喜び、悩みなどを共有している	・送迎時に、その日の子どものエピソードを伝えたり、写真やボードなどで日々の様子を知らせている。クラス便りでは子どもの成長を感じた瞬間や、遊びの中での学び、保育者の思いなどを伝えるようにし、保護者と共有していけるようレイアウトなどにも配慮している ・参観会、懇談会や個人面談で子育てについて話をする機会を設けたり、子どもの成長を喜び合ったり、保護者の悩みを丁寧に聞いていたりして共有に努めている	A	A	・こども園と小学校は、起震車体験やメロディオンなど、お互い行き来し交流していく事ができた。普段から自然な形で学校へ来て遊んでいるのもとても良いので、来年以降も交流を継続していけるといいと思う。	・園の取組みを分かりやすく玄関に貼り出したりやコモンで配信したりすると共に、送迎時に子どものエピソードなど保護者と言葉を交わしながらコミュニケーションを取る中で、成長過程における子どもの成長した姿や子育ての悩みなど保護者の思いに寄り添い共有していく
		(1)近隣の園との連携の推進	小学校のスタートカリキュラムへの参加をはじめ防災訓練や公開保育、評議員会などを通して、情報共有や交流をしている	・中薬科小学校とスタートカリキュラムをはじめ、散歩で小学校へ出て遊ばせてもらったり保育や授業参観、1年生との授業体験や起震車体験、今年度はさらに小学校教員によるメロディオン指導は子ども達にはわかりやすく丁寧な対応やポイントを押さえた指導方法など職員も勉強になった貴重な体験だった ・清沢こども園と季節ごとの交流があり、川遊びや親子お楽しみ会、海の生き物教室、大道芸観覧など、一緒に体験する関わりができています。公開保育や、公開授業、評議員会、地域会議に参加し、情報共有や交流も図れている	A	A	・地域からおまつりなどの参加要請の話があった。時間帯や日程などの調整を今後は検討したい
10 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	地域の自然の中での活動や地域の行事への参加等を積極的に保育に取り入れ、地域の自然や文化、農産物に関わる機会をもっている	・地域の行事(お田植祭・拔穂祭)や、じゃがいも堀・お茶摘み・梅やマスカットの収穫体験など、地域の資源を活用し、たくさんの人に触れ合い色々な事を見たり聞いたりして貴重な体験ができた。また地域の世代交流では、日頃お世話になっているわらびこ、田んぼの地主人、JA、トマト農家の方々を迎え、子ども達と遊んだり食事をしたり交流し親しみながら子どもも園の様子を知ってもらう機会となった	A	A		・地域交流が根付いた園として、今後も積極的に働きかけ、子どもが地域を知り、地域に親しみが持てる行事や企画を行っていく